



TITLE:

<特別寄稿>死者とフィクション

AUTHOR(S):

柏端, 達也

CITATION:

柏端, 達也. <特別寄稿>死者とフィクション. 哲学論叢 2019, 46: 44-56

ISSUE DATE:

2019

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/250141>

RIGHT:

死者とフィクション

柏端達也

1. 終焉テーゼと死の害悪

死者はある意味われわれにとって身近な存在である。私はときどき、亡くなった祖母について母と話をする。お供えをするとき母は位牌に語りかけたりさえする。祖母と母との関係はいまや修復されたようだ。だが、死者がそのように「身近な存在」であるゆえに覆い隠されがちな問題がある。それは死者がどのような存在者かという問題である。いや、そもそもそれは存在なのだろうか。以上の問いは哲学的な問いであると同時に、われわれの常識的感覚に関わる問いでもある。

理解可能な「常識的感覚」の一つを最初に確認しておこう。すなわち、死が存在の終焉だという感覚である。それは、死が、死にゆく存在の真の意味での消滅を意味するという主張として理解することもできる。そのような主張を、慣例に従い「終焉テーゼ」と呼ぶ。終焉テーゼは、たとえば古代ではエピクロス、現代ではトマス・ネーゲルなどの、「死」に関する重要な議論の前提にもなってきた⁽¹⁾。

加えて、第一に常識に属する前提として、死がもたらす害悪を挙げておきたい。死ぬということ自体が死ぬ当人にとって悪いことだというのは、通常、前提にしてよい事柄であろう。こうした考え方にはもちろん反論がある。とはいえ、死に対する正反対の価値づけは、ここでは反論を形成しない。死ぬのがとても良いことだったとしても、本稿が関心をもつ諸問題は生じうる。興味深い反論はむしろ、死は「何でもない」という考えと、そこに至る論証である。前段落の終焉テーゼがその反論の重要な前提となる。理屈は単純であり、死が存在を終焉させるなら、それは害悪を被る主体をも消滅させるはずだというものだ。主体がいなければ死の害悪を被ることもできないというわけである。この理屈は、エピクロスの有名な論証の一部を構成するものにほかならない。

エピクロスは終焉テーゼと死の悪との衝突を示唆し、哲学的論証の結論として後者を否定した。ちなみに死について論じる現代の論者の多くは、エピクロスとは別の道を探り、二つの前提を調停しようとする。しかし、死の害悪をめぐるそうした議論の状況を以下で概観したいわけではない。本稿の目的は、二つの前提から帰結しうる存在論上の諸問題に対処するための方法論的なスケッチを与えることである。そのスケッチを、私は、適切な解答に向けての見取り図として提案したい。

2. 存在論的な諸問題とアナロジー

死者の存在にまつわる問題を、吉沢文武は次の三つに整理している（吉沢, 2012, p. 3ff.）⁽²⁾。

- ① 害悪を被るべき主体がそもそも死後には存在しない。
- ② 生きている人と関係に立つと思われる対象が死後に存在しない。
- ③ 有意味と思われる名前の指示対象が死後に存在しない。

第一の点（①）は、前節で見たように、死そのものがもたらす害悪を死んだ当人に帰属させようとしたとき問題になりうる。しかしそれだけではなく、死後に被る他の種類の害悪を死者に帰することをとも困難にすると考えられる。たとえば、ある人との生前の約束を破ることは、死んでしまったその人に対する裏切りであり、その人に対して悪をなすことであると言われよう。もちろん悪をなしたのは裏切った瞬間である。これをもし文字通り通常の裏切りの悪として説明しようとする、①の論点が頭をもたげてくる⁽³⁾。

第二の問題（②）は、関係項の存在を要請すると思われる関係が、生者と死者とのあいだに結ばれることがあるように見えるという問題である。いま生きている誰かが、故人との関係があると修復したり、過去の偉人があると尊敬しはじめたりするかのようになわれは語る。そのような語りは、生者間の関係に通常あてはまる「関係を修復する」や「尊敬する」等の動詞が使われているにもかかわらず、真理条件が明瞭ではない。もっぱら死者の名を目的語とするような動詞もある。「追悼する」などがそうである。だが、②の論点を考慮すれば次の疑念が生じるだろう。「追悼する」は見かけと異なり他動詞的に解釈すべきではないということだろうか。つまり、追悼は関係ではないのだろうか。

第三に、もしすでに存在しないものが死者だとすれば、死者の名が空名になってしまうという問題がある（③）。死者の名は、他の空名と同様、通常のやりとりにおいて十分有意味に使われているように見える。祖母が死んだとき、私は、祖母の「名」の使用に関して大きな意味論的変革を感じなかった。

過去形一般の話をここでの問題群から適切に区別されたい。ソクラテスは弟子たちに尊敬されていたと語るとき、そこでもっぱら過去が語られているなら、②や③にまつわる問題は生じない。そこでは、通常の尊敬関係がかつて成り立っていたとされているにすぎないからである。問題をより明確にするために、平凡な過去形の文を例にとろう。

[1] ソクラテスはアテナイに住んでいた。

これを次のように解釈することは標準的であり自然であるだろう。すなわち、

[2] $\Diamond(\exists x(x = \text{ソクラテス} \ \& \ \text{住んでいる}(x, \text{アテナイ})))$

この「 $\Diamond(\phi)$ 」は、 ϕ が過去のあるとき成り立っていたことを表す演算子である。[2]を強いて日常文で表現するなら、「ソクラテスはアテナイに住んでいるような何かだった」となる。[2]のように解釈された[1]の「ソクラテス」は、もっぱら過去の存在を指しているのとれる。気にすべき存在論的問題はそこにはない。ソクラテスは過去にたしかに存在したからだ。同様に、弟子たちがソクラテスを尊敬するという関係も過去にたしかに成り立っていた。もしもそれらを、過去のことを語っているというだけの理由で存在論的に問題視するならば、たとえば自分自身の過去の存在をも問題視しなければならなくなるだろう。そしてそれは過去そのものに対する懐疑へとつながる。そうした哲学的議論はたしかにありうるが、それが死者特有の問題を生み出すことはない。

ところが、[1]を、次の[3]のように解釈することもできなくはない。

[3] $\exists x(x = \text{ソクラテス} \ \& \ \Diamond(\text{住んでいる}(x, \text{アテナイ})))$

これは、「ソクラテスはアテナイに住んでいたような何かである」と読める。この解釈のもとで[1]の「ソクラテス」が指すのは、われわれと同じように存在する対象である。[3]の主題は現在の何かなのだ。このときには、③の論点が問題になる⁽⁴⁾。

死者をめぐるこうした問題はいわゆる「非存在対象」の問題の一種と見なせる。したがって、死者の問題を、別の種類の非存在対象に関わる問題と比較することはいろいろと有益であるだろう。それは重要な共通性と相違を明らかにしてくれるはずだ。私がとりわけ興味深いと思うのは、フィクションのキャラクターをめぐる諸問題との対比である。

死者に関する前述の①、②、③と平行的な問題を、フィクションのキャラクターについても想定することができる。すなわち、

- ①' 害悪を被るべき主体がそもそも現実には存在しない。
- ②' 現実の人と関係に立つと思われる対象が現実には存在しない。
- ③' 有意味に思われる名前の指示対象が現実には存在しない。

②'と②の類比は分かりやすいだろう。シャーロック・ホームズを尊敬する者はワトソンだ

けでなく、現実にも存在すると言いたい。だが、そのことを表現するのにおなじみの動詞「尊敬する」が使われるにもかかわらず、何によってそれが真になるのかが明瞭でない。そのさいの「尊敬する」は、じつは、主語と目的語を伴う二項述語ではなく、現実のシャーロキアンの状態をもつばら表す単項述語なのだろうか。しかしだとすれば「ホームズを」の部分は何なのか。③'の論点については、死者についてよりもこれまで多くのことが論じられてきたことは周知であろう。

ここまではきれいな対比が見てとれる。死者たちはかつて活躍していた。彼らがいたのは過去の世界である。フィクションのキャラクターは物語のなかで活躍する。彼らがいるのは——「いる」と言ってよいなら——物語の世界である。死者たちは現在もういないし、フィクションのキャラクターは現実にはいない。にもかかわらずわれわれは、彼らについて語り、彼らと関係を結ぶように見える。

しかし、どこまでも平行的であるわけではない。いまでも私は、フィクションのキャラクターが物語の世界に「いる」と言うことに躊躇した。ソクラテスが紀元前に文字通りいたと信じられるのと対照的にである。ホームズがドイルの小説世界に「いる」と語られるとき、それは正確には何を意味しているのか。理解可能な次の文を考えられたい。

[4] シャーロック・ホームズはロンドンに住んでいる。

これを次の形で理解しようとしたときでさえ、重要な疑問が生じると思われる。

[5] $\Diamond(\exists x(x = \text{シャーロック・ホームズ} \ \& \ \text{住んでいる}(x, \text{ロンドン})))$

ここでの「 $\Diamond(\phi)$ 」は、ある物語のなかで ϕ が成り立つことを表す演算子である。問題は、そこで ϕ が「成り立つ」ということをどう理解するかである。これについては、すでにさまざまな難点が指摘され⁽⁵⁾、さまざまな理論が提案されている⁽⁶⁾。もちろん、

[6] $\exists x(x = \text{シャーロック・ホームズ} \ \& \ \Diamond(\text{住んでいる}(x, \text{ロンドン})))$

にいたっては、③'と直接的に衝突するように見える（③に対する[3]と同様）⁽⁷⁾。

一方、①'の論点については、それが真に問題であるかどうかから意見が分かれうる。フィクションのキャラクターが害悪を被るとはどのような事態のことを言うのか。物語のなかで滝つぼに落ちて死にかけるとはホームズにとっての災難だが、①'の問題はそれで

はない。ここで問題にすべきは、ホームズが現実¹に被害者である。われわれは現実の人氣投票でホームズがポアロに敗れるといったケースを考えるべきだろうか。しかしその敗北が残念なのは、ホームズにとってというより、どちらかといえばコナン・ドイルにとってであると思われる。いずれにしても、フィクションのキャラクターが現実²に被害者を被ると言える直観的に明白なケースを、われわれはもっていないのではないか。

生前に交わした約束を破ることで死者を裏切ることができる。だがフィクションのキャラクターを裏切ることはいできない。というのも、彼らとは文字通りの意味で約束を交わさないからである。約束を交わしたとき死者はまだわれわれと同じ生者であった。われわれもいずれ死者になるだろう。フィクションのキャラクターとわれわれとのあいだにないのは、この「なる」の関係である⁽⁸⁾。ここにディスアナロジーがある。

死者とフィクションのキャラクターとのあいだには類似と差異がある。そこで次のように考えられるかもしれない。すなわち、問題の生じ方の類比に注目すれば、両者を「非存在対象」という上位カテゴリーのもとで統一的に扱うことが正当化される。他方で、問題の生じ方の違いを考えれば、それぞれの下位カテゴリーに対して異なる特別あつらえの形而上学的説明枠組みをあてがうことが必要となる。理論的な観点からは分かる話である。

しかしかならずしもそうはならないことを以下で示そうと思う。

3. ハイブリッド的アプローチの擁護

死者とは何かという問いは、一見して、死者がどのような存在者かを問うものだ。そしてその問いに形而上学の統一的な理論で答えることも自然に期待される。フィクションのキャラクターについても同じである。たとえばフィクションのキャラクターを、人ではなく、人の活動に依存して存在する抽象的対象のカテゴリーに分類することも考えられるだろう。そのとき、フィクションのキャラクターは現実³に存在する対象になる。ただし具体的な対象としては存在しない。存在を否定するのではなく具体性を否定することで、①'、②'、③'の論点に代えるわけである。それによってうまく説明できるようになることもあるにちがいない。また、死者についていえば、論理そのものを体系的にかなり異なる仕方⁴で理解することを思いつくかもしれない。すなわち [3] に対して、

[7] $\exists x (x = \text{ソクラテス} \ \& \ \Diamond (\text{住んでいる}(x, \text{アテナイ})) \ \& \ \neg \text{存在する}(x))$

の式を可能にするような理解である。[7] において存在は述語によって表現されている。そこでの「 \exists 」は、その名にかかわらず、「存在」を意味しない。それはただ、アイテムが

議論領域に「対象」として含まれることを示すだけである。そのことを「有る」と表現してよいなら、ここでは存在と有が区別されていると言ってよい。このアプローチは「マイノング主義的」と形容されるだろう。マイノング主義的なアプローチのもとでソクラテスは、①、②、③にあるとおりもはや存在しないが、語りの対象ではあることになる⁽⁹⁾。

抽象的对象の説もマイノング主義的アプローチも、「ホームズ」や「ソクラテス」などの話をするときわれわれが何について語っているのかという問いに対して、それぞれに見合った統一的存在論を与えようとしているように見える。もちろん、それらを洗練するには、技術的な工夫や哲学的な考察がさらに必要である。ただ私には、こうした統一のアプローチに対して、もっと根本的な疑念がある。統一的なアプローチはいずれにせよ、「非存在対象」を語るといふことの本性に由来する理由により、壁に突きあたるのではないか。

どちらも理解可能な次の二つの文を見比べてほしい。

[9] シャーロック・ホームズはコナン・ドイルによって生み出された。

[10] シャーロック・ホームズは名探偵である。

抽象的对象の説がまずよくあてはまるのは [9] であろう。まさに、ホームズはドイルの創作活動によって生み出された抽象的な存在者であり、抽象的であるがゆえに空間的に位置づけがたく、本のページに見られる文字列のような具体的な存在者とは区別される。ホームズはむしろそれらをトークンとするタイプの存在である。抽象的なのでホームズはドイルの死後も永遠に存在しつづけるだろう……等々。だが [10] に目を移したとき理解が難しくなる。抽象的な対象が、名探偵であるという性質をもつとは思えないからである。いかなる自然数もアルカリ性でないように、いかなるフィクションのキャラクターも名探偵ではない。では [10] をどう理解すればよいのか。事情は [4] についても同様である。抽象的对象が「ロンドンに住む」とは、どういうことなのか。

技術的工夫や哲学的考察を経て、抽象的对象の説のもとで [10] や [4] に意味を与えることはできるかもしれない⁽¹⁰⁾。統一的なアプローチに期待されるのはもとよりそうしたことである。しかしそれよりも無理がないと私が思う道は、[10] や [4] の発話と、[9] の発話を、別種の言語現象へと分類することである。すなわちそれらを、言語行為の種類のレベルで異なるものとするのである。

たとえば [9] は、この世界についての報告と見なせるだろう。すでに示唆したように、それが現に存在するある種の抽象的对象について何かを語っていると考えるのもそれなりに自然なところがある。対照的に [10] や [4] は、それとはまったく異なり、人や都市

といった具体的な対象について何らかのことを語るふりをする発話であると理解することができる。後者の理解は、偽装説と呼ばれる伝統的なアプローチの一つである。

フィクションに関わる言語現象が異種混交的だという前提のもと、それぞれにまったく異なる説明を与えるのは、私の知るかぎり、ソール・クリプキによって最初に明示されたアイデアである。そのアイデアはクリプキの一九七〇年代の複数の発表草稿——それらは二〇一〇年代まで未刊行であった——に見ることができる (Kripke, 2011)。抽象的对象の説と偽装説という組み合わせも彼に倣ったものである。それぞれの説に対するクリプキの特徴づけは独特で示唆に富むものだが、ここでのクリプキの冴えはむしろ、フィクションという一つのテーマに対し複数のアプローチを併用するというハイブリッド性にあると思われる。

フィクションをめぐるクリプキの考えについては別の場所で論じたことがあるので (柏端, 2017, Ch.5)、ここではこうした方法論一般の正当性を強調したい。ハイブリッドのアプローチの自然さと適切さは、扱うべき題材自体の多様性に注目すれば理解してもらえと思う。フィクションを語ることは人々の日常的な営みの一部をなしている。その営みは、本来的にさまざまな目的、文脈、バリエーションをうちに含むものである。人々がそれに関わる仕方も多様であり、個別的な営みの一つ一つがさまざまな側面をもつ。ある人は作者として、または朗読者として、別のある人は読者として、聴衆として、あるいは、批評者として、編集者として、演者として、舞台提供者として……営みに関わりうるであろう。そして各参加者は、関わり方に応じて異なった態度と行為を要求されるだろう。それらの行為の多くは言葉を用いたもの (発話行為) である。それぞれの発話は、発話者の関わる側面に応じて異種的であり、非常に異なる適切さの規準に従う。以上のような営みを構成する言説のすべてを、もし一様な仕方で分析しようとすれば、無理が生じるのは当然である。

比喩を使ってよいなら、[4] や [10] の発話者は、フィクションを語るという営みのいわば内部にいる。報告の偽装に加担し、あたかもホームズという人がいるかのような前提で話をしている。それに対し [9] の発話者は、その営みに外部から関わっている。自分の棲む世界を構成するある抽象的对象について、文字通り報告を行なっている。ちょうど自分の部屋の家具がどこで作られたかを報告するような仕方である。両者が異なる種類の行為であることは、フィクションについてやはり外部から語る次の [11] が、[4] や [10] の発話と両立するのを見ることによって確認できる。すなわち、

[11] シャーロック・ホームズという名探偵などほんとうはいない。

[11] は [4] や [10] を論駁しない。[4] や [10] のあとに [11] を発話してできることは、せいぜい場を白けさせることである。しかしだいたいの場合、われわれは [4] や [10] と [11] の発話のあいだのモード切り替えを、驚くほどスムーズかつ無意識に行なえる。フィクションに関わる言説の異種性が軽視される原因の一つはそのあたりにある。

さて、このハイブリッド的（またはキメラ的）アプローチを、私は、死者をめぐる言説にも適用したいと考える。というのも死者もまた、本稿の冒頭で見たように、われわれの日常に入り込んでいるからである。アプローチの有効性が期待できる。

4. 死者の不在がもたらすほんとうの困難（モード1 bにおける死者）

一つの営みに参与する仕方の違いを「モード」という語で表すことにしよう。電化製品などによくあるモード切り替えのイメージである。そしてここではとくに、営みの外部から参与することを「モード1」、営みの内部で参与することを「モード2」と呼ぶ。さらに対象（営み）からの距離に応じてそれぞれのモードを「a」と「b」に分けることにする。

フィクションのキャラクターについての発話を例に説明しよう。モード1 aでは、フィクションを語るという営みが最も対象化されている。すなわち、現実との対比で、それがまさにフィクションであることを明言したり、主題の何かを否定したりするための発話である。すでに挙げた [11] などがそうである。モード1 bは、フィクションであることはむしろ前提にして、そのフィクションについて説明するような発話である。既出の例文では [9] がこのモードで使われるだろう。モード2 aでは、フィクションを語るという営みに比較的自由な仕方でも参与している。典型的には読者がフィクションのキャラクターをあたかも実在の人物であるかのように形容するときの語り方である。[4] や [10] がそれにあたる。モード2 bは、フィクションそのものを構成する文の発話である。それらの文を、作者は生成し、朗読者は読み上げることができる。

代表的な例をまとめると次のようになる。

- [11] シャーロック・ホームズという名探偵などほんとうはいない。（モード1 a）
- [9] シャーロック・ホームズはコナン・ドイルによって生み出された。（モード1 b）
- [10] シャーロック・ホームズは名探偵である。（モード2 a）
- [12] ホームズはいつしよに暮しにくい男では決してなかった。（モード2 b）

いくつか補足説明をしておこう。(1) 抽象的対象の説のもとで [11] は、ホームズの現実性ではなく具体性を否定していることになる（ホームズの何が否定されるかはどのような

存在論を採用するかは依存する)。(2) モード間の区別は、文をどのように使うかの区別であり、文の型や種類の区別ではない。それゆえ [9] をモード 1 a で使うことも可能である。ドイルが男性作家であるといった前提が共有されていれば、[9] にモード 1 a 的な含みをもたせること（つまりホームズが実在の人物でないことを伝えること）は容易だろう。(3) フィクションであることを前提にしていることは、現実のアイテムとフィクションのアイテムとを現実の関係で結ぶことのうちに、特徴的に示される。[9] 以外に、たとえば、ポアロよりホームズが好きだと述べるような発話（複数のフィクションにまたがる比較）もそうである。(4) 偽装説をとるなら、モード 2 の発話における「ホームズ」は生身の人間を意味することになる。したがって、[10] や [12] の発話は、偽であることを意図的に口にする行為の一種になる。(5) [12] は、ワトソンが語ったことにされているが実際には作者が書いた文である。もちろんその文は [12] のように日本語に翻訳することができ⁽¹¹⁾、われわれはその朗読者としてフィクションを語る営みの中心に参加できる。

さて、以下では、死者について語ることをこの「モード」の観点から眺めることにする。それによって、すくなくとも死者をめぐる存在論的な問題圏に対する整理と見通しが与えられるだろう。死者についての語りもまた、フィクションに関わる言説と同じくらい種々雑多な発話行為の集まりと見なせるからだ。

過去を単純に語ることはモード 2 a に相当すると考えられる。たとえば、

[1] ソクラテスはアテナイに住んでいた。(モード 2 a)

すでに見たように [1] は多義的だが、この場合はもちろん [3] ではなく [2] の意味で発話されたものとして [1] を理解しなければならない。

モード 2 b における発話は、次のようなものを例と見なせるだろう。

[13] そのことで、ソクラテス、私はいま思い浮かんだことがあります。以前にある人がそのことを言ったのを聞いたのですが、忘れてしまっていました。それで、その人の言ったことなのですが、それは真実なる思いなしに言論を加えたものが知識だということです⁽¹²⁾。(モード 2 b)

これは過去を直接的に構成する発話である。(テアイテトスが実際このとおりに語ったのか、対話篇はほぼプラトンの創作ではないのかといった疑問はここでは無視する。) 過去に生きていた人々の発言自体もこのように記録され、さらに他言語へと翻訳できる。

すでに述べたが、死者をモード2で語ることに存在論的困難はとくにないと思われる。もちろん、過去の实在そのものを疑うようなさしあたり分離しておける議論の文脈を別にして。もし[1]が真であるならソクラテスは実際にいて、もしプラトンの創作でないとすれば[13]は実際にテアイテトスによって語られたのである。

また、終焉テーゼという大前提を認める以上、死者の現在における不在を述べるモード1 a も、十分に明白な意味をもつものとして区別できよう。たとえば、

[14] ソクラテス本人はもはや存在しない。彼は紀元前の哲学者だ。(モード1 a)

問題は死者に関するモード1 b である。モード1 b では、死者がまさに死者として扱われ、死者の現状や、死者に対して現在のわれわれが現在もつ関係などが語られる。死者への追悼や、死者とわれわれとの関係の変化、死者が死後に被る害悪などを語る文脈を、モード1 b は形成する。これらの説明が一筋縄ではいかないと思われるのである。

われわれがここで直面しているのは第2節で見た②または①の問題にはかならない。つまり、死者が、関係や性質の現時点における帰属先になっているように見えるという問題である。この問題に対して、還元主義や消去主義のアプローチをまず試してみるというのは定石かもしれない。還元主義は、死者のカテゴリーをおなじみの具体的な対象（死体や位牌、写真など）のカテゴリーと同一視する戦略である。消去主義は、「死者」についての語りをおなじみの対象についての語り（生きている人の心的状態についての語りなど）へとパラフレーズする戦略である⁽¹³⁾。いずれも、いくつかの例や文脈では比較的自然な説明を与えるだろうが、モード1 b の全貌を説明するにはとうてい至らない⁽¹⁴⁾。

いや、モード1 b 自体、その全貌を一つの理論で説明する必要はないのだ。死者についての特有の雑多な語りが展開されるのはこのモード1 b である。モード1 a はより単純であり、モード2は死者に特有のものではない。モード1 b のもとでの発話を一つにまとめるのは、「死者」という大きなテーマであり、それはすなわち、たとえば終焉テーゼという共通の前提——それはモード1 a でよりはっきりと示される——であり、死者が被ると見なされる固有の害悪に対するわれわれの倫理的な態度である。このような状況は、モード1 b そのものにハイブリッド的なアプローチを適用することを正当化するだろう。

モード1 b のある部分は特定の種類の理論で説明できる。還元主義や消去主義よりも自然な説明と広い適用範囲を期待できるのは、偽装説である。追悼の仕方の一つの典型を想起されたい。そこで追悼者は、あたかも眼の前に誰かがいるかのような仕草で、追悼文を読み上げる。追悼文も、死んだ本人に語りかけるような文体である。だがもちろん、棺の

中の遺体はその言葉を聞いていないし、写真の向こう側に何かがいるわけでもない。追悼者も聴衆もそれは承知している。死後の魂を信じていなければ追悼ができないということはない。ようするに追悼者は、目の前の死者に話すふりをしているのだ。このような偽装は、位牌に語りかける場合、あるいは「いつ帰ってきててもよいように」部屋を生前のままにしておく場合などにおいて、同様に見られるであろう。まるで人物が死んでいないかのように周囲が振る舞うことは、われわれの日常的な営みの一部をなす。

偽装説は死者に対するわれわれ生者の態度のうちの重要かつ特徴的な部分を説明すると私は考えるが、死者との「関係修復」や過去の人物に対する「尊敬」などは、なお消去主義的に解釈するのがよいかもしれない。つまり、生きて存在している人の心の状態変化をもっぱら語っているにすぎないと解釈するのである。そうした消去主義をとりたくないのであれば、死者を真剣に「対象」と見なすことを視野に入れなければならないだろう。

死者を「対象」と見なすことへと向かわせるより強い理由がある。それは、死者が死後に被害悪（死後に享受する善）の説明のためというものである。たとえば次の[15]のような語りまたは事柄をどのように理解すればよいのだろうか。

[15] 死者たちの多くは誰からも忘れ去られるという二度目の不幸の直中にある。

ここでは死者に対して量化がなされ、性質が帰属させられているように見える。[15]のほかに、すでに挙げた例だが、生前の約束が守られなかったり、死後に名誉を回復したりするケースを語る場合を考えてもよいだろう。それらを偽装説や消去主義に基づいて理解することには無理があると私は考える。すくなくとも、[15]のようなケースにそれらの説を適用するうまいやり方を私は思いつけない。かといって還元主義を持ち出せば——それも死者を「対象」化する一つのやり方であろうが——明らかな誤りを口にすることになるだろう。死体や写真がこの種の不幸の主体になるとは思えないからだ。

死者を具体物のなかに探すよりも、何らかの仕方で特徴づけられる抽象的な存在としてこの世界に位置づけるほうが有望であるかもしれない。ちょうどホームズを人間の活動に依存して存在する抽象的対象と考えたようにである。しかしそのように考えたとき、前述した「なる」の関係が、理論にとって厄介となる。その関係は、われわれとフィクションのキャラクターとのあいだにはないが、死者とのあいだにはある。あらゆる死者はかつて生きていた誰かがな[・]ったものであり、われわれはみないつの日か死者になる。すると人は死の瞬間に具体から抽象へと移行する存在なのだろうか。そして、同一の名前が生前と死後で著しく異なるカテゴリーのものを指すということなのだろうか。これは、人や人の名

に対するわれわれの考え方に大きな改訂を迫る道であるように思われる。

あるいは、ここでようやくマイノング主義の出番だと考えられるかもしれない。論理に対する標準的な理解から離れ、存在と対象とを区別し、すでに存在しない死者もまた [15] に見られるような量化や性質帰属の対象となると考えるのである。新しい理解に沿った論理学の精緻化は可能であろう。それはよい。ただ、このアプローチをとるには、見た目や名前だけでなく実質的にも大掛かりな哲学理論の採用が必要になると予想される。その点で、理論にとって他の適用場面となるより広い問題領域や⁽¹⁵⁾、存在と対象の概念をめぐる独立の議論による補強が望まれる。

冒頭で見た死そのものの害悪が、このモード 1 b においてこそ表現されるかもしれないという点が重要である。とりわけ、その害悪がもたらされるとすれば死後であると——自然に、あるいはエピクロスの——考えるなら、そうなるであろう。それゆえ、死者に関するモード 1 b における語りの説明はおそらく最重要の課題となる。もっとも、本稿ではその課題へのアプローチの仕方を、断定的にでなくほのめかしたにすぎないのだが。

註

(1) エピクロス「メノイケウス宛の手紙」; Nagel (1970). もちろん終焉テーゼと対立する意見や反論は存在する。実際、死を終焉と見なさずに生活する人もいるだろう。すぐに思いあたる伝統的な異論は、死後の魂や不滅の魂を持ち出すものである。より現代的で、意外に真剣に唱えられることの多い見解は、死後も人が死体として存在するというものである（この議論の文脈ではとくに Feldman (2000)）。

(2) ただしここに掲げるのは吉沢の用いる文言どおりのものではない。

(3) 同様の問題はもちろん、死後に起こる「良い」出来事（死後に名誉が回復されたり、正当に評価されたり、復讐に成功したりすること）についても生じる。

(4) 死んだ人を考えるのでなければ、[3] の形式が [2] の形式に比べて問題含みであるということはない。たとえば私は、(a) 吹田市に住んでいるような者でかつてあったし、(b) 吹田市にかつて住んでいたような者である。この(a)と(b)の違いを意識させられることは通常ない。

(5) たびたび指摘される一例として、非極大性（真理値のギャップ）の問題がある。滝つぼに落ちたときホームズの体毛が偶数本だったかどうかについて、真偽を云々することはそもそも無意味であるように思われる。それに対し、毒杯を仰いだときソクラテスの体毛が偶数本だったかどうかは、もはや誰も知りえないが確定的な真理値をもつと考えてよいように思われる。

(6) 「◇」は可能演算子としてよく使われる記号であり、またここまで「物語の世界」という表現をしているが、しかしそれによって私は、フィクションを語る文の理解に可能世界意味論が最適であると示唆したいわけではない。

(7) さらに、[5] や [6] においてホームズが住むとされるロンドンと、現実のロンドンとのあいだの同一性も問題になるだろう。[2] や [3] における「アテナイ」が、現在も存在する都市アテネの単なる別名であると自然に考えられる点と比較されたい。アテナイがアテネに「なった」とわれわれは言う（それらの通時的同一性を哲学的に問題にしようとしても）。だが、小説のなかのロndonはけっして現実のロンドンにはならないのである。

(8) Yourgrau (2000, p. 50) はこれを人の「存在論的な旅 (ontological travel)」と呼ぶ。

(9) 死者をめぐる存在論的な問題に対しておそらく最も精力的にマイノング主義のアプローチを擁護している論者は、ユアグロー (Yourgrau, 1987, 2000, 2019) である。吉沢 (2012, pp. 8ff.) も参照されたい。

(10) たとえば van Inwagen (1977, 1983)。

(11) [12] は延原謙訳の『緋色の研究』の 23 頁にある文である。

- (12) この文は田中美知太郎訳の『テアイテトス』の229頁にある。
- (13) ここで言う「還元主義」と「消去主義」については柏端 (2017, pp. 37ff.) を参照されたい。
- (14) ある文脈では死者を数えることは死体を数えることに等しい。だが、死者の名誉回復が、死体が残っているかどうかには依存すると考える者はいないだろう。
- (15) フィクションのキャラクターや伝説に登場する架空物をマイノング主義的に考えることはむしろ定番であると言われるかもしれない (古典的なものとして Parsons (1975) など)。しかしたとえばユアグローは、それらへのマイノング主義の適用は適切でないと考えている (Yourgrau, 2000, pp. 51–52)。このアプローチが何を説明するのに適しているかについて、意見の一致があるわけではない。

文献

- エピクロス (1959). 「メノイケウス宛の手紙」, 出隆・岩崎允胤訳, 『エピクロス——教説と手紙』 (65–74 頁), 岩波書店.
- コナン・ドイル (1953). 『緋色の研究』, 延原謙訳, 新潮社.
- Feldman, F. (2000). 'The Termination Thesis,' *Midwest Studies in Philosophy*, 24, 98–115.
- 柏端達也 (2017). 『現代形而上学入門』, 勁草書房.
- Kripke, S. A. (2011). 'Vacuous Names and Fictional Entities,' in his *Philosophical Troubles: Collected Papers, Volume 1* (2011, pp. 52–74), Oxford University Press.
- Nagel, T. (1970). 'Death,' in his *Mortal Questions* (1979, pp. 1–10), Cambridge: Cambridge University Press. (1989 年, 永井均訳, 『コウモリであるとはどのようなことか』, 勁草書房.)
- Parsons, T. (1975). 'A Meinongian Analysis of Fictional Objects,' *Grazer Philosophische Studien*, 1, 73–86.
- プラトン (1966). 『テアイテトス』, 田中美知太郎訳, 岩波書店.
- van Inwagen, P. (1977). 'Creatures of Fiction,' *American Philosophical Quarterly*, 14, 299–308.
- (1983). 'Fiction and Metaphysics,' *Philosophy and Literature*, 7, 67–77.
- 吉沢文武 (2012). 「死者の問題のためのいくつかの形而上学的枠組みについて——マイノング主義の検討——」, *Contemporary and Applied Philosophy*, 4, 1–18.
- Yourgrau, P. (1987). 'The Dead,' *Journal of Philosophy*, 86, 84–101. (1995 年, 村上祐子訳, 「死者」, 『現代思想』, 第23巻第4号, 193–208 頁.)
- (2000). 'Can the Dead Really Be Buried?' *Midwest Studies in Philosophy*, 24, 46–68.
- (2019). *Death and Nonexistence*, Oxford: Oxford University Press.

〔慶應義塾大学文学部教授・哲学〕